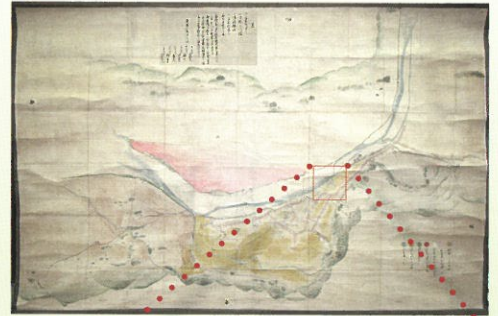
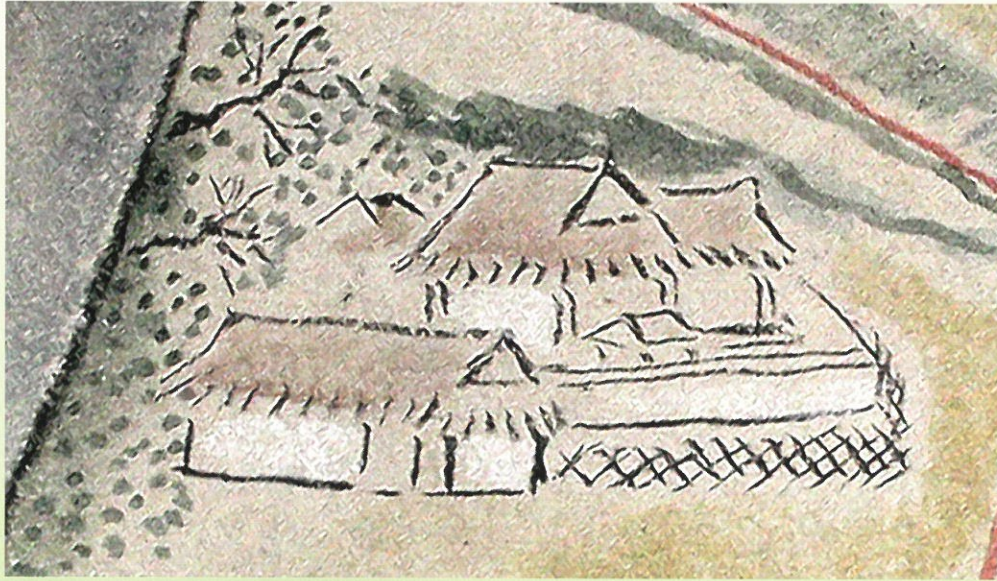


市史編さんだより 第18号

発行 令和7年5月31日

《村絵図から》江戸時代の「^{みきじんや}三木陣屋」のすがた



左上写真 三木陣屋（推定）
右上写真 宝暦2年高木村井堰相論百間五寸之図（全体と拡大図）
左下写真 三木陣屋の建物を移築したと伝えられる正入寺旧庫裏（現存せず）（『三木市史』より）
中央下写真 三木陣屋の跡地（現三木市中央公民館）

「三木市有宝蔵文書」に「高木村井堰相論百間五寸之図」と題された大きな絵図があります（文書番号1590、『三木市有宝蔵文書』別巻地図収載）。この絵図は、美嚢川に掛けられた高木井堰の修築をめぐり三木町と高木村との間でおこった争論に関わって宝暦2年（1752）に作成されたものです。

この絵図の中央やや右寄り、美嚢川の川岸近くに三木町の町並みの建物よりはるかに大きな建造物が描かれているのが注目されます。この場所は、現在の三木市中央公民館付近に相当すると考えられます。ここには、戦前まで旧三樹小学校が建てられていましたが、さらにさかのぼる江戸時代には三木町を含む美嚢郡の村々を支配していた上野国館林藩（越智松平氏）の上方役所である「三木陣屋」があったとされてきました。しかし、役所の所在地を明記した文書が残されておらず、むしろ別の場所（現在の新町公民館付近）に「御陳屋」があったことを示す成

立年代未詳の絵図（宝蔵文書無番「播磨国三木町絵図」）があり、情報が混乱しているのが現状です。

今回紹介する絵図は、すでに知られていたものですが、まさに現在の中央公民館付近に相当する場所に、かなり大きな建物が描かれていることから、これこそが館林藩の三木陣屋（役所）の姿ではないかと考えられます。

図に描かれた建物は、^{ながやもん}長屋門らしき横に長い建物と^{ついでい}築地塀に囲まれた数棟の建物群で構成されていたようです。主屋と目される建物は、^{もやぶく}茅葺き屋根の入母屋造りだったことがうかがわれます。注目すべきは、^{やらい}築地塀の外側に少し距離を置いて矢来で敷地を囲っていることです。塀と矢来の間に堀があったかどうかまではわかりませんが、外部からの侵入を拒むかのような構造は、まさに武家の陣屋と呼ぶにふさわしいものといえるのではないのでしょうか。（木村）

交通アクセス 神鉄粟生線「三木上の丸」駅より徒歩5分

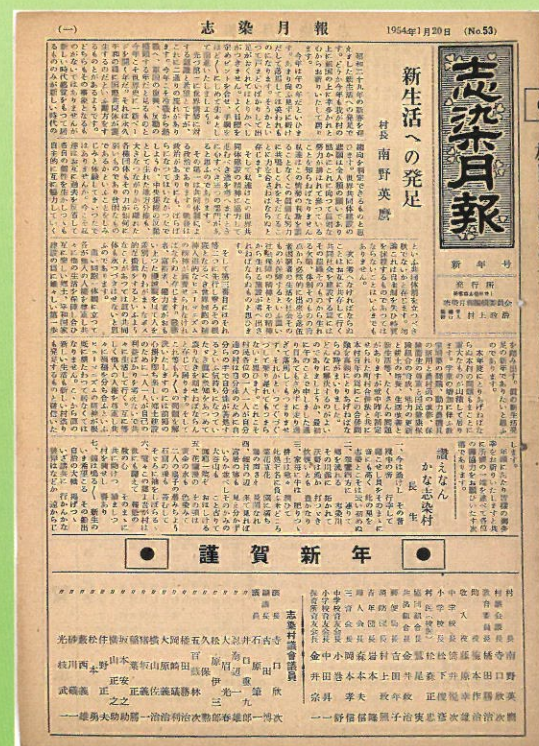
《市史の窓》三木市域の自治体広報紙と『志染月報』

自治体が刊行する広報紙には、行政の取り組みや経済動向の説明、諸団体の活動やイベントの紹介など、地域に関する様々な情報が掲載されています。これらは広報、公報、弘報と呼称は種々ありますが、いずれにせよ近現代史研究において基礎的な史料です。

三木市では1954年以来『広報みき』が刊行され、また旧吉川町でも1955年から2005年にかけて、『広報よかわ』が発行されていました。これらは現在の市史編さんでもよく活用されていますが、今回はさらにさかのぼり、旧志染村において刊行されていた『志染月報』をご紹介します。

『志染月報』は第6号から第56号まで、期間にして1949年9月から1954年6月までが残存しています。志染村と三木市の合併を機に終刊となり、最終号では村長の南野英磨が、2面にわたり合併の経緯や所感を寄稿しています。占領期から高度経済成長期直前まで、志染村や地域社会の動向に関する貴重な史料と言えます。

『志染月報』の刊行を巡っては、興味深い変遷が判明します。創刊時の経緯はわかりませんが、同紙はもともと「志染振興会」という団体が刊行していたようです。『志染月報』庶務』という史料によりま



民の良識を高め農村の民主化と農村文化経済の向上」にあると強調しています。志染村における戦後民主主義の熱量を感じとることが出来るでしょう。なお志染振興会についても不明点は多いですが、第13号(1950年4月15日付)に「四Hクラブ」(農業青年クラブ)へと改称する記事があり、有志の農村青年層が中核となっていた組織のようです。

『志染月報』の記事を見てみると、村の性格が紙面にも反映されていました。全体的に社会教育に関する記事が多く、また1面には村政や社会教育に関する南野村長の寄稿がしばしば掲載されています。たとえば第25号(1951年2月25日付)では、志染村における社会教育と生活改善運動の紹介や翌月の村民大会に言及しつつ、これらによる自己の改造がひいては村や敗戦国日本の新生につながると説いています。このほか小中学校の取り組みや青年団などの活動の紹介や、村民が投稿した文芸作品や論説も数多く掲載されており、戦前から社会運動や文化運動が盛んな志染村の特性が表れているようです。

このほか村の行財政についてはもちろんのこと、農業講座や月々の料理の献立など村民生活に沿った記事が紙面を埋めていました。また物資の統制解除やサンフランシスコ講和条約を記念した取り組みなど、時代背景をうかがえる記事が多数掲載されています。盛んな公民館活動や新生活運動、投票への熱心な呼びかけなども、この時代を象徴しています。

1950年代には美濃郡内諸町村において、自治体広報紙が次々と創刊されたことが確認出来ます。たとえば『弘報中吉川』はサンフランシスコ講和条約発効を機に創刊され、村誌編さんなど郷土建設に関する言及が多数見られます(1952年8月1日付)。また『奥吉川村弘報』は第3号から第38号(1952年6月から吉川町成立直前の1955年5月まで)が確認でき、この時期の農林畜産業の動向や地域社会の状況について多くの知見が得られます。

こうした旧町村の広報紙は、多部数刷られたものであっても破棄や劣化などでその多くが散逸し、今では貴重となっています。近現代史を研究する上で、印刷物であっても史料としての重要性は非常に大きなものです。編さん室では今後も史料調査とともに、様々な資史料の価値や保存についてアピールしていくつもりです。

(吉田)

写真 『志染月報』No.53 (1954年1月20日発行)

市史編さん室が行う「調査」とは？～石造物調査 その1

はじめに 地域に残るさまざまな「文化遺産」の中で、もっとも身近なものは石を加工して造られたいわゆる「石造物」と呼ばれるものでしょう。市史編さん事業では、歴史や文化に関するさまざま調査・研究を行っていますが、今回は石造物の調査についてご紹介します。

さまざまな石造物 ひと口に石造物といってもさまざまなものがあります。三木市民にとっては、三木城跡の伝天守台に建つ別所長治公辞世の句碑がもっとも知られた石造物といえるのではないのでしょうか。



写真 さまざまな石造物

一般的には、お寺に関係するものであれば、まず石造りの仏像が思い浮かびます。「石造りの仏像」といわれてもピンとこない方もいらっしゃるかもしれませんが、道端に祀られているお地蔵さんがその代表格でしょう。墓石はいうまでもありませんが、供養塔を含めるとその種類は多種多様です。また、石灯籠も忘れてはいけません。

神社に関するものといえば、まず鳥居があげられます。鳥居の左右にはやはり石灯籠が建立されている場合があります。鳥居をくぐり境内に入ると、小さな神社ですともう目の前に本殿があり、一對の狛犬が私たちの方を向いています。

公園や広場に行くと、何かを記念するモニュメントが建っていたり、児童公園にも公園の名前と完成した日を記したプレートを目にすることがあります。

さらに、お寺や神社といった特定の施設に入らなくとも、道にあるだけで道しるべが建っていたり、小さな石祠や石堂が祀られてるのに出くわしたりします。

紙の資料がない場合でも、そうした石造品を調べて

いくことで、神社や寺院、特定の施設の歴史がわかったり、個人の業績や地域の歴史がわかったりすることがあるのです。

石造物の調査を始めるにあたって 市史編さん事業が平成26年度からスタートしましたが、その時にはすでに教育委員会の石造物調査ボランティアの方々がかなりの石造物について調査をされており、膨大な量の情報が個票にまとめられていました。事前の情報としてはいぶんと助かりました。

しかし、いざ市史編さん事業が始まると、これまでの業績に感謝しつつもやはり自分たちの目でもう一度確認しないといけません。

個票に記された内容の確認もさることながら、なぜ、その石造物がそこに残されているのか、実際現地に行ってみて肌で感じることも大切なことです。また、周辺に未調査のものが眠っているかも知れません。読みにくい字の再確認も必要です。「現場百回（遍）」という言葉に胸に刻み現地調査に臨むこととしました。

また、調査に当たっては石造物の研究者である藤原良夫さんにご教示いただきました。

なお、調査に必要なグッズとしては、

- 1 ノート（調査票）
- 2 筆記用具（できれば三色のペンがあれば便利）
- 3 メジャー（2メートルくらいのもの）
- 4 参考資料（地図、干支と和暦・西



写真 藤原良夫さんと供養塔を調査する市史編さん事務局スタッフ



写真 石造物調査の必携アイテム

- 暦が対照できるものが便利、あとは石造物の図解など）
- 5 へらやほうき（ハンディタイプ）
- 6 懐中電灯（自然光ではわかりにくい銘文を読むのに便利）

などがあげられます。（次号へ続く）

（廣井）

新三木市史第7巻『資料編 文化遺産』、地域編5『細川の歴史』の発刊

令和7年3月31日付で、新三木市史の配本10冊目・11冊目となる第7巻『資料編 文化遺産』、地域編5『細川の歴史』を発刊いたしました。

通史編は、『学術的水準の高い市史』というコンセプトのもと大学教員を中心とする専門研究者との連携により編さんが進められています。『資料編 文化遺産』は、全5章からなり、まず平面的な芸術作品を中心に上げた第1章「絵画・書・型紙」、次に立体的な文化遺産を取り上げた第2章「彫刻・梵鐘・石造物」、不動産の文化遺産を対象とする第3章「建造物・庭園」、主に無形の文化遺産を取り上げた第4章「民俗」という各分野毎に章構成したあと、一つの寺院の歴史と文

化遺産を総合的に捉えるという方針のもと、口吉川町の蓮花寺を取り上げた第5章「蓮花寺の文化遺産——人・もの・くらし——」を最後に配置しています。

また地域編は、『住民参加の自治体史編さん』というコンセプトを実現するため、本の制作全般にわたり、地域住民の方々にご参加いただいております。地域編としては8冊目の配本となる『細川の歴史』も、多くの地域住民の方々のご協力のもと完成いたしました。発刊にあたり、改めてお礼申し上げます。

通史編第7巻『資料編 文化遺産』（頒価 3800 円）

地域編5『細川の歴史』（頒価 3000 円）

新三木市史 既刊分も好評発売中！！

新三木市史は、既刊分（通史編2冊、地域編7冊）が好評販売中です。市史編さん室（郵送対応可）、みき歴史資料館、三木市観光協会、山田錦の館、市役所内売店たんぽぽ、三木市立中央図書館、細川町公民館（『細川の歴史』のみ）で販売しています。お問い合わせは、市史編さん室まで（連絡先は、下記奥付をご参照ください）。

〈既刊分〉

通史編

第4巻 資料編 古代・中世 ￥3800

第5巻 資料編 近世 ￥3800

地域編

1 『三木の歴史』 ￥3800

3 『別所の歴史』 ￥3000

4 『志染の歴史』 ￥3000

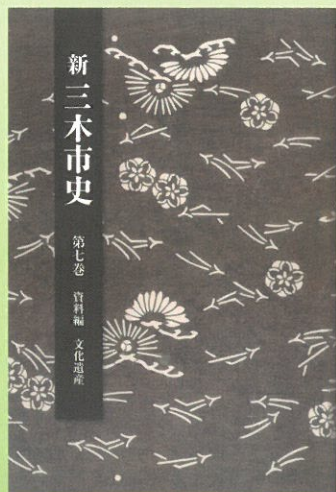
6 『口吉川の歴史』 ￥3000

7 『緑が丘の歴史』 ￥2500

9 『青山の歴史』 ￥2500

10 『吉川の歴史』 ￥3500

（いずれも税込み）



古い資料や写真を探しています！

皆さんのお近くにある古い記録類は、地域の歴史を物語る大切な歴史遺産です。下記のような資料の情報をお持ちの方は、ぜひ市史編さん室までご一報ください！

◆くずし字で書かれた帳面や一枚ものの文書などの古文書◆明治・大正・昭和の古いノートや記録（日記・手紙など）◆三木市域の古い写真、絵画、映像など◆自治会などの団体、地域でのグループ活動などの記録や資料◆古いふすまや屏風（古文書が、下張りに使われていることがよくあります）etc.

市民ボランティア募集中！

市史編さん室では、市内の文献資料を記録に残す作業を行う市民ボランティアを募集しています。古文書が読めない方でも参加可能です。見学だけでも大歓迎です。詳しくは市史編さん室までご連絡ください。

◆開催日時：毎週水・木曜（どちらか1日の参加でもOK）13:00～15:00／場所：みき歴史資料館2階市史編さん室

活動内容：①古文書のデジタル撮影、②江戸時代以降のくずし字解読（翻刻作成）、③資料の修復（しわのぼし・糊づけ等）、④新聞検索（各紙から三木に関する記事を選別）、⑤古文書現物からの目録作成、⑥パソコンでの目録データ入力

市史編さんだより 第18号（令和7年5月31日発行）

編集発行：三木市総務部 市史編さん室

連絡先：〒673-0432 兵庫県三木市上の丸町4-5 みき歴史資料館2階 電話 0794-83-1120 / FAX 0794-83-1190

ホームページURL：https://www.city.miki.lg.jp/soshiki/9/